

# 東國太平記

一上

卷

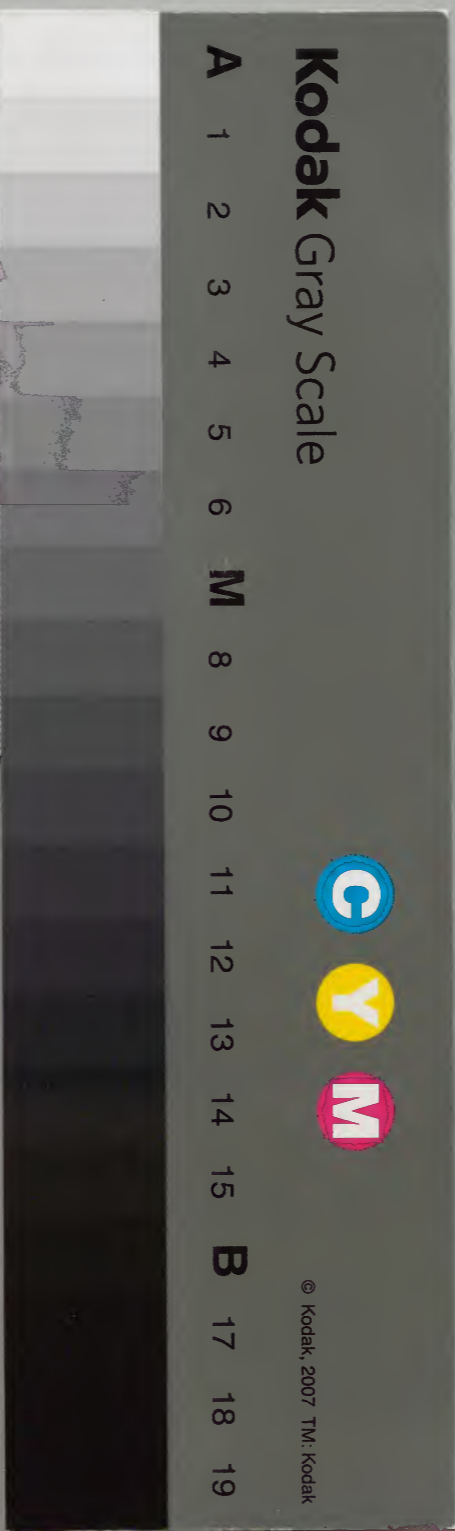
二百十卷

庫文閣内		
六八函	三三五〇〇	和書類
二四架	一八冊	

和書  
三三五〇〇  
號

共十八

内閣文庫	
番號	和 33500
冊數	18 ( 1 )
函號	168 354



141

東國太平記序

近代軍記行于世者數部矣

雖然皆闕會津戰事之事迹

諒不能無遺憾焉以故酒井

讚牧左少將源忠勝子ニヨロニ苦搜索

數年于茲時麾下之士有杉



原親清者是乃上杉宿將杉  
原常陸介親憲族而經歷北  
越東奧數十戰之徒也忠勝  
命之令輯慶長庚子辛巳之  
會津戰伐之古事輒筆記焉  
讚牧臺閣繁務之餘暇讀之

賞之甚以為珍焉我僥倖得  
其書于孰賀商舶而弄賞有  
歲竊ヒソカニヲモシム以上杉景勝謀畧勇猛  
廟筭幄籌卓落于近世獨步  
於一時况於會津守戰奇畫  
最上攻擊勇悍一日拔數城

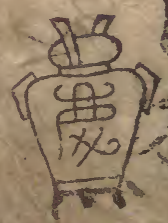
勢如破竹。至夫福嶋松川之  
戰。摧政宗堅陣。奪伊達帷幕  
者。其勇威重名冠于天下也。  
我苟欲俾上杉武勇徧識于  
後世。於螢雪之下。恭起麁毫  
而訂正杉原氏筆記。以備後

覽者然矣。昔

延寶八年庚申冬十月良奠

國枝清軒

謹題于江州大津西湖樓



東國太平記總目録

卷之一

太閤秀吉公寵臣逆心思立事

附關白秀次公生害之事

卷之二

上杉取立神刺原新城事

加州前田利長逆心之沙汰

並利長人質進上之事

上杉使者藤田能登守上洛事

上杉謀反之沙汰事

藤田能登守

會津立除事

栗田刑部

藤田能登守上洛之事

伊奈圖書助

會津被下事

河村長門守

卷之三

於大坂城上杉退治御評定之事

並諸軍勢關東下向之事

卷之四

上杉景勝白川表軍兵手配之事

直江山城守兼續以謀越後國諸軍人

催一揆事

上杉伊達矢合之事

御所會津御發向

卷之五

附リ 花房志摩守注進之事

從伏見城注進

並ニ 嗣君自宇都宮御歸之事

卷之六

小山御陣所御評定

並ニ 本多中書

榊原式部 御諫言之事

卷之七

伊達政宗歸城

並ニ 攻取白石城事

卷之八

政宗自白石城引退岩手澤

並ニ 濱田治部留白石城事

卷之九

越後國一揆蜂起

附 堀丹後守直寄手柄之事

一揆勢圍越後國三糸城事

附 溝口宣勝村上義明後卷事

自小山江戸江御歸陣之事

蒲生飛驒守秀行以使者示岡野

左内志賀布施事

卷之十

景勝自長沼歸會津城事

秀康卿景勝方江御使者之事

直江兼續諫景勝事

並 最上發向陣觸之事

越後國津川城落去之事

並 一揆退散之事

卷之十一

直江山城守與諸大將軍評定

並 攻長谷堂之城事



附、モカニヨレ寂上義光ウエロミキ後卷對陣之事

直江山城守兼續攻入最上事

並攻取幡屋城事

卷之十二

寂上義光被乞加勢於伊達事

附、政宗加勢之事

並上杉方松本奎之助討死之事

上山之城口合戰

附、上杉方穗村造酒允討死事

上泉主木討死之事

自會津遣飛脚告關原口敗軍之由於

直江陣

卷之十三

直江山城並上杉之諸軍勢引拂長谷

堂口事附、洲川合戰之事

伊達政宗攻福嶋城事

卷之十四

本庄出羽守宮代合戰之事

政宗信夫郡燒劔之事

並木幡四郎右衛門討死之事

附須田大炊助逢隈川合戰事

卷之十五

松川合戰政宗攻福嶋城事

景勝御赦免上洛之事

卷之十六

○杉原彦左衛門物語覺書條々

直江山城守兼續事

同病死之事

大坂鴨野口上杉承事

前田慶次郎事

關原以後直江事

上杉家紋之事

松川合戰之事

鳴野合戰之事

同上杉勝軍之事

輝虎臣北条丹後守事

小田原城攻陣拂之事

前田氏詩歌之事

景勝家軍奉行之事

上杉家旗之事

信州川中嶋合戰之事

岡野左内事

青木新兵衛殿之事

小田切所左衛門事

長井善左衛門事

本庄繁長高名之事

東國太平記卷總目錄終

東國太平記卷之一目錄

太閤秀吉公寵臣逆心思立事

第四葉

附關白秀次公生害之事

東國太平記卷之一目錄終

東國太平記卷之一上

杉原彦左衛門親清選

國枝清軒重訂

○太閤秀吉公寵臣逆心思立事

太閤秀吉公御治世ノ比五奉行ノ内ニモ石田治部  
 少輔三成殊更寵臣ニシテ天下ノ用斜ラス是ニヨ  
 ツテ其身モ及ナキ志シヲサシハサニ一度天下ヲ  
 望思フユヘニ關白秀次公ヲ讒言シ亡シ奉リ此上  
 ハ幼君秀頼公ヲモリ左候ト稱シ秀吉公御他界ノ  
 後是非ニヲイテ天下ヲウバハントソユケル就夫  
 我望ノ障ニナルベキ人多キ中ニ江府内大臣公ヲ

目ニカケ。是ヲ滅シタキ存念止事ナリ。熟ト了然ラ  
運スニ弓箭ヲ取御所公ト敵對スベキ太名ハ上杉  
中納言景勝ナリ。是ヲ味方ニ引附ントゾ巧ケル景  
勝ハ天性言葉スクナク世ニ愛相ナキ人ナリケレ  
バ。三成取寄ベキ便ナリ。然ドモ景勝家老直江山城  
守兼續ニ軍國ノ政トヲ任セラレケルヲ三成ヨキ  
便ト心得其事トナク直江ニ近付懇志ナリケル故  
ニ直江モ天下第五奉行第一ノ治部ナレバ。ナシカ  
ハ疎畧ナルベキ。程ナク懇志ノ間トナリ又直江ハ  
謙信ノ時ニ与板城主樋口与総左衛門ガ子ニ与板

口与六ト申テ小姓ニ召仕レ無双ノ出頭トナリケ  
ル比。上杉ノ家老直江大和守實綱並儒者專柳齋ト  
一所ニ森名左衛門ト云者ニ討シ男子ナカリケレ  
バ山城守ヲ聲名跡トシテ直江ガ家ヲ相續レ。此比  
ハ三十二方石ヲ領知シ。米澤ニ在城レ。倍臣タリト  
云トモ御所公ノ御内本多中書柳原式部并伊兵部  
同前ニ。太閤ノ御前ヘモ出頭シケルガ。此者先祖ハ  
木曾義仲ノ四天王。樋口次郎兼光ガ後胤ニテ。武畧  
智謀ニ達シ。詩文和歌ノ道ニクラカラス。殊ニ人物  
骨柄無双ノ器量ニテ。己ニ秀吉公ノ御意ニモ小早

川隆景直江山城守兼續堀監物直政がゴト夕ナリ  
調リタル武士ヲ見ズト常々仰ラレケルホトノ  
者ナリケルサレバ上杉ノ家中大小事共ニ山城守  
ニマカセ置シケルヲ治部少輔モ能知ケルユヘニ  
是ヲ引附ケルトカヤ或時三成ハ直江山城守ト只  
兩人指向ヒ夜深マデ酒宴シテ遊ビケルカ密ニ山  
城守ニ向テマフシケルハ侍ト生シ弓箭ニ携ル者  
天下ニ望ナキハ男子ト称スルニ足ス指當リテ秀  
吉公ハ匹夫タリトイヘ凡天下ヲ掌握ニ歸シ玉フ  
我モ一度ハ四海ヲ治ント思フ心入止事ナラサレ

ドモ秀吉公御在世ノ中ニハ思ヒタツマビ御他界  
アル上ニテ旗ヲ揚ト思フナリ御邊モ景勝ニ逆心ヲ  
スメ旗ヲアゲサセ天下ヲ覆シナバ景勝ヲ亡シ御  
身關東ノ管領トナリ給ヘ我等ハ將軍トナリ京鎌  
倉ノ代ノゴトク兩人シテ世ヲ治ヘキト語ケル直  
江モ大膽ナルモノナリケレバ此策ヲ心ヨク思ヒ  
左様ニ思立給ハバ上杉家中ノ事ハ一向ニ我ニマ  
カセ給ヘソレニ付謙ヲメクラシ見ルニ蒲生會津  
宰相氏郷ハ武道逞シキ人ニテ中ノ御所公ニ指  
ツバキタル大將ナリ此人ノ子藤三郎秀行ハ御所

公ノ聳ナリ領分奥州ト下野國ト隣ツク御所公從  
ヅヨミ是ニシクコトナシ。縱貴殿思召立トモ御所  
公氏郷ト持ツバケバ中ノ退治叶フベカラス先  
氏郷ヲ殺シ其跡へ景勝ヲ國督ヲサセ東西ヨリ立  
ハサミテ打撃スベキ事然ベシト呷キケル故三成  
是ヲ承引シ氏郷ヲ毒害シ其跡藤三郎秀行家老共  
ヲ唆カシ蒲生家中大キナル騷動ヲ出來サセ其咎  
ニ秀行百二十万石ヲ沒收イタシ終ニ十八万石ニ  
テ野州宇津宮へ所替サセ其跡會津へ上杉景勝ヲ  
入替思ノマニ謀ヲ運シケル景勝先祖上杉民部

大輔憲顯ノ時尊氏公ヨリ越後ヲ給リシヨリ以來  
今ニ至テ二百年餘領知セシ國ヲ出し事ナレトモ  
會津五郡外ニ仙道七郡伊達信夫二郡出羽ノ庄内  
佐渡國ヲソヘ以上百五十万石ノ地ヲ賜リ會津山内  
ノ本城ノ外二十一个所ニ城アリシカバ家老トモ  
ヲ分遣シ御所公ニ指續東國ニ番ノ大名タリ直江  
山城守兼續ハ米澤ニ在城シ大國但馬守南山ノ城  
其備後守清長ハ白石ノ城本庄越前守繁長ハ森  
山ノ城須田大炊助長義ハ築川ノ城安田上総介順  
易ハ小峰ノ城中条与次郎ハ鮎具ノ城木戸元齋ハ



藤嶋ノ城。色部長門守ハ金山ノ城。下条駿河守ハ二本松ノ城。杉原常陸介親憲ハ猪苗代ノ城。五百川修理ハ白川ノ城。志田修理ハ大寶寺ノ城。松本伊賀守ハ大浦ノ城。岡左内栗生美濃守ハ福嶋ノ城。其外藤田能登守ハ津川ノ城。嶋津月下齋ハ長沼ノ城。方々ノ城主其數記スルニ遑アラズ。角テ慶長三年八月十八日。大閣秀吉公御他界ナサシ。其後五大老五奉行ヲ始。諸大名噉訴一揆シ。京伏見大坂ノ念。騷是偏ニ三成ガ御所公ヲ討ンタメノエナリケル。後ニハ貳心ノ輩ラアツテ。三成遂ニ奉行職ヲ罷ラシ。佐和山へ

蟄居シヌ是。慶長四年三月ノ事ナリ。同八月十八日。豊國大明神御祭禮事。濟同二十八日ニ加賀肥前守利勝ハ加州へ下リ。同二十九日上杉中納言景勝會津へ歸國ス。其砌直江山城守ハ年來存ズル者アルニヨリ。九月朝日ニ大坂ヲ立。同三日ニ佐和山ノ城へ立寄。三成モ是ヲ聞。高宮マデ遶ニ出ソレヨリ。同道シ。佐和山ノ城ニテ馳走斜ナラス。夜深テ三成密ニ申ケルハ。先年ヨリノ本望今ニ達スルコトヲ得ス。貴殿ノ心底モ耻ク候トアリケレバ。直江打笑御心中承度候トアリシカハ。三成モ月日ノ往事矢ノ射ガコ

東國大平言卷之二  
トクナレバ。イツマデ相待申スベキヤ。其段ハ推量  
モ中々。プロロカニコソト申サレケレバ。直江ハ三成ガ  
傍ニ立寄。景勝會津へ歸ラシ候間。我等是ヲ勸テ。新  
城ヲ取立。其上ニテ近國ノ牽人ヲ召抱申ヘク候。此  
段京大坂へ聞へ申候ハ。御所立腹アツテ。會津發  
向ノ催シ是アルベシ。今天下ヲ校量スルニ。景勝ト  
懸合セ合戦ヲ致スベキ大將ナシ。然トキ。御所  
自身大將ニテ會津へ向ハルベク候。其時景勝ハ手勢  
六方ニテ。白川ノ城ヲ一ノ木戸トシテ。御所ト對陣仕  
ルベク候。貴殿ハ其弊ニ乘テ。伏見ノ城ヲ攻取。諸大

名ノ妻子大坂ニ罷在候ヲ人質ニ取堅メ。伊勢。美濃  
尾張。三川。遠江ヲ切隨へ。江戸へ推寄申サルベク候  
御所是ヲ聞。白川表ヲ引拂。江戸へ取除申サレ候ハ  
ハ上杉勢ヲ以テ跡ヲ付。佐竹義宣横合ニ出合候ハ  
バ。恐クハ關東總敗軍ニ及ビ申ベク候。關東一味ノ  
大小名モ大坂ノ妻子ヲ取ルノ事ヲ聞バ。皆貴殿へ  
降參致スベク候。其勢ヲアハセテ品川ヨリ江戸  
へ推詰給ハ。我等ハ上杉勢ヲ以テ江戸へ取詰表  
裡手ヲ合セ立挾打取ニ陳平張良ガ智アリトモ。  
イカントシテ利ヲ得候ハンヤ。東西ニ陣ヲ立南北

ヨリ攻取候ハ、兩月ヲ過サズシテ。關東ハ討平ゲ  
申ベク候。然シテ後ニ君臣ノ分アキラカニ。逆順ノ勢  
定テ。貴殿大功ヲ四海ニ耀シ。中興ノ大業一度ニ立  
トキンバ。國家ノ仕置ハ我等ノ知トコロニテ候ハ  
スト。辨舌明ニ申しケレバ。三成大ニ悦ビ。武略智謀  
誠ニ文武兩道ノ才智世人ノ外ニ出ル者ニアラス  
ンバ。如斯ノ謀トアルベキヤ。今其方ノ手立ヲ聞ト  
キハ。天下ノ治亂興廢恰モ目前ニ在カゴトシ。我其  
元ノ策トニ隨ヒ。天下ヲ覆サン事疑ヒナシト。喜悅  
斜ナラズ。直江弥手立ヲ相談シ。佐和山ヲ立テ下リ

シカバ。三成モ醒井マテ打送リテ別ニケリ。三成ハ  
佐和山ニ在ナガラ。長束大藏太輔正家。増田右衛門  
尉長盛。淺野彈正少弼長政へ申シ遣シ。京伏見騒動  
絶ル間ナシ。九月七日ニ重陽ノ御祝儀トシテ御所  
公大坂へ下リ給シ處ニ。大坂ノ城ニテ。御所公へ御  
茶ヲ進シ候ニ事寄。淺野彈正土方勘兵衛雄久。大野  
修理亮治長等御所公ヲ指殺奉ルベキ企アリト披  
露アリシカバ。大坂俄ニサワキ出。伏見ヨリ御所公御  
人數夜通ニ馳來リ。只今一戰アルベキ體ナリシカ  
トモ。皆三成ガ謀トニテ。増田長束ガ詐リテ拵シ事

ナレバ別条ナシ。淺野彈正ハ奉行職ヲ止ラレ甲州  
ヘ引込。土方勘兵衛ハ常州ヘ流罪シ佐竹義宣ニ頼ラ  
ル。大野修理亮ハ野州結城ヘ配流セラレ少將秀康  
頼リ給フ。叔秀頼公并淀殿ヨリ増田長盛徳善院玄  
以尼幸藏主片桐市正ヲ御使ニシ。七年太閤御他界  
以後秀頼幼稚タルニヨリ。諸大名動モスレバ噉訴ニ  
及事。誠以テ嘆シク候。太閤御遺言ニテ。秀頼大坂ニ  
御座候ヘバ。天下ノ重リ。實ニ中興ノ根本ニテ候。加賀  
太納言利家逝去シ。毛利輝元上杉景勝前田利勝皆  
歸國セシメ。大坂以ノ外危ク候間。誰大坂ヲ守護イ

タシ候ハンヤ。今世上穩ナラヌ。又砌京大坂ノ念願ハ御  
所ノ伏見ニ居ラシ其間隔リタル故ナリ。只今ヨリ  
大坂西ノ丸ニ住居シテ秀頼ヲ守立給フベシトアリ  
シカハ。同十一日ニ御所公西ノ丸ヘ入セ給フ。増田長  
束相談シ。大廣間金ニニ重ノ殿主ヲ上テ。進上シケ  
ルニヨリ御威勢前日ニ百倍セシトナリ

傳曰秀吉公ノ氏姓詳ナラス。大徳ヲ賞センガ爲  
種々ノ奇恠ヲ記スト。雖凡皆不信。本尾州愛智郡  
中村ノ出生ニテ父ヲ不知。母ノ家ニアツテ八歳  
ノ時同國光明寺ヘ登セケレ。凡程ナク還俗シ。漸

成長シテ始、松下加兵衛方從僕ト成、天性聰明勇  
悍ニシテ十六歳ノ時、熟譚ヲク松下ゴトキ小身  
者ニ事ルトモ人ニ知ラル、程ノ功ヲナシカダシ。  
所詮命ヲ捨主ヲ求ンニハト松下カ家ヲ出ニケリ。  
然ルニ其比織田信長公、武威益昌ニ名、大將ノ闢  
アリケレバ、縁ヲ求テ下僕トナリ。木下藤吉トゾ  
申ケル利口才、覺發明ニシテ晝夜ニ奉公シ智謀  
群ヲ拔武勇猶人ニ超ケレバ、次第ニ昇進シテ羽  
柴筑前守秀吉ト申ケル。其頃、天下大ニ亂テ合  
戰止時ナシ。羽柴秀吉信長公ノ命ニ從テ向フ所

ノ強敵ト從ト云事ナシ、仍備前備中播磨但馬因  
幡五箇國ノ太守トゾ成給フ然ル所ニ信長公ノ  
家臣明智日向守光秀逆心ヲ起シ、天正十年六月  
二日ニ賊兵ヲ率テ洛陽本能寺ノ旅館ニ於テ信  
長公ヲ弑シ奉ル。此時秀吉公ハ備中高松ノ城ヲ  
攻テ毛利元就ト合戦ク最中ニ將軍父子明智光  
秀カ爲ニ討シ給フト聞テ大ニ驚キ、悽ニ悲ニ給  
フ事甚深ク、則弓箭ヲ納メ旗ヲ卷テ毛利元就ニ  
和睦ヲ乞、君敵明智ヲ討滅シ度旨ヲ瀧元就聞テ  
其志ヲ感シ、誠ニ義士ナリト云テ、秀吉ノ請ニ應

比今マデ敵ナリシカドモ。元就モ使者ヲ以テ最  
懇ニ信長公變ヲ吊ヒ。次ニ軍勞ヲ慰メララル。加之  
軍馬ヲ行装シテ。兵糧ヲ運送セン事ヲ約セララル。  
秀吉喜悅淺カラズ。急ギ都ヘ打テ上リ。山崎表ニ  
於テ明智ト合戦シ。忽光秀ヲ討滅シテ。主君ノ讐  
ヲゾ報奉ラル。是ヨリシテ秀吉ノ武名天下ニ播  
威風四海ニ恐レ。直ニ大將軍トナツテ。後陽成院  
天正十年十月三日從五位上ニ叙セラル。同豊臣  
姓ヲ賜フ。夫ヨリ昇進シテ高ク關白太政大臣從  
一位ニ昇レ。城郭ヲ京都伏見大坂ニ築テ。王盡シ

美盡セリ。天下ノ諸侯及ビ大小ノ勇士晝夜ノ出  
仕ヒマモナク。何ニ不足ハ無シカレ。世嗣ノ若君  
ナキニ依テ秀吉公ノ甥三好秀次公ヲ養子トシ。  
關白職ヲ讓テ。洛陽聚樂ノ城ニ居置レ。其身ハ大  
坂伏見ノ城ニ隱居マシクテ。太閤ノ御所トゾ申  
ケル。或説ニ秀吉公ノ父ハ木下弥右衛門ト云人  
ニテ。織田信秀ノ鉄炮ノ者ナリシガ奉公ヲ辭シ  
テ其在所ナレバ尾州愛智郡中村ニ歸住ス。同母ハ  
同郡御器所村ノ人ナリ。持萩中納言ノ息女ナリ  
トカヤ。其故ハ中納言罪アリテ。尾州村雲ノ里ヘ

配流セラル息女一人アリテ二歳ノ時中納言卒  
去セラル依之後室娘ヲ誘ヒテ京へ上リ多年ヲ  
ハセシカ其比洛陽兵亂ヲコリ在京成カタキニ  
ヨリテ息女十六歳ノ時又尾州へ下リ居給ヒシ  
ガ十八歳ノ時弥右衛門ニ嫁シテ女子一人ト其  
次ニ天文五年丙申ノ春正月朔日ノ朝男子一人  
トフケ給ヘリ是則秀吉ナリ童名サルト云フニ付  
テ様々ノ異説アリ皆實ナラス唯申年生玉フニ  
ヨリ父母何トナク其名ヲ猿トヨバレシニ面貌  
モ自然ニ猿ニ似又仕業モユサカレクテ猿ニ似

タミケルニヤ此説尤モ可ナリ秀吉ノ嫡ハ成人  
ノ後同國シ之村民弥介ニ嫁ス弥介後ニ三好武  
藏守三位法印一露ト称ス是則關白秀次公ノ實  
父ナリ依テ秀次ハ秀吉姉弟ノ子ニシテ秀吉公  
ノ甥ナリ秀次ノ舍弟丹波少將秀勝同辰千代丸  
三人ノ實母ハ秀吉公ノ姉ナリ法名瑞龍院ト号  
ス秀吉公ノ父弥右衛門ハ天文十二年卯ノ夏病  
死セラレ後室女子ト秀吉ト二人ノ子ヲ養育シ  
テ彼里ニ住給フ其比信長公ノ同郷ニ筑阿弥ト  
云フアリ煩フ事アル故ニ奉公ヲ止故郷ナレバ

尾洲ノ中村ニ歸リ居ケルヲ里人ナリハカリテ  
弥右衛門後室ノ家へ筑阿弥ヲ入テ夫婦トナス  
此故ニ筑阿弥ハ秀吉ノ繼父ナリ筑阿弥子二人  
アリ男子ハ幼名小筑ト云フ。後ニ羽柴小市郎秀  
長ト称ス。其後美濃守ニナリ又大納言ニ任セラ  
ル。大和紀伊和泉三箇國ヲ領ズ。秀吉胤替ノ弟ニ  
テ大和太納言ト云リ。斯テ秀吉公ハ江州淺井備  
前守長政ノ息女艶龜類ナシト聞及テ妾トセラ  
シケル處ニ。文祿元年壬辰ノ冬ヨリ懷胎ノ心地  
ナリシカバ。大キニ悦ビ四箇ノ大寺ニ課テ胎

高僧ヲ請ゼラシ。大法秘法ヲ修シ殊ニ變成男子  
ノ法ヲゾ行ハセラシケル。明レバ文祿二年八月  
廿日。安産成就ノ爲ノ御祈禱ニ大坂ノ城中ニシ  
テ。連歌ノ會ヲゾ促シ玉フ。其比ノ宗匠花ノ下紹  
巴ノ發句ニ

大般若ハラミ女ノ祈禱カナ

一ニハ過テ産ノ紐トク

脇 昌化

未百韻滿ザルニ若君誕生アルコソ不思議ナレ  
天下ノ大名ハ言ニ不及下万民ニ至ルマテ。千秋  
万歳ノ其聲ハ欣々然トシテ降臨ニ滿リ。頓テ元



服アラセ玉ヒ秀頼公トゾ申シケルニ歳ニ成玉  
ヒシ比。秀吉公寵愛ノアマリ思慮シ玉ヒシハ。我  
一世ノ後秀頼ガ敵トナランズルモノハ。關白秀  
次ナリ。如何ハアラント宣フ。時ニ治部三成折ヲ  
得タル思ヒシテ。早秀次公兼テ逆心ノ風聞有之  
由。御前近ク馴寄テ低語シテゾ謔シケル。雖然秀  
吉公サシテ許容モナカリケヒバ。三成猶モ深ク  
思察シテ。計トヲツ企テケル。秀吉公ヨリ秀次公  
後見ノ爲トシテ中村式部少輔。田中兵部大輔兩  
人ヲ附置シシカバ。兩人ノ後見等物ゴト強ク諫

言セシ故ニ。秀次ノ御前次第ニ疎ク成ニケル。其  
比田中ハ撰河兩國ノ堤普請ノ奉行トシテ。彼地  
ニ居ケルヲ夜通ヒニ召寄テ。先ニ三成ガ宅へ呼入  
奥ノ亭ニ請ジ。二人頭ヲ指合セテ。三成降キ申ケ  
ルハ。如何ニ田中殿御自分ノ命ヲバ。三成ガ助ケ  
候ト云ヘバ。田中思寄サル故。大ニ駭キ珍シキ仰  
カナト云ヒケレバ。三成重テ今度ノ一大事如何  
遁玉フベキ。御首ハ某續タリト云ケルニゾ。田中  
甚ダ氣色シ變ジ何ト申サル。ゾ。三成殿過言ガ  
トシキ仰セニ候。日本ノ諸士ノ中ニ田中ガ身上

白地ニ云シ人ハ覺ナシ。御邊ガ當時出頭シテ。諸  
事思フマ、ニ振舞ルトテ。首ヲ續タルハ命ヲ助  
タルハナド無用ノ誇言ニ候。假令誇言スルトモ。  
上ニハ豈用玉ハンヤ。若罪科紛ナキニ於テハ。速  
ニ我首ヲ捕テ見參ニ入奉ラレヨト。臂ヲ張刀ノ  
柄ニ手ヲ懸テ。思ヒ切タル形勢ナリ。時ニ三成申  
スヤウ。事ノ仔細ヲ述ザレバ。御氣ニ障タルモ尤  
モナリ。秀次公御謀叛ヲ企玉フ事。隠アラサレバ。  
大閤ノ上意ニ中村ハ病氣ニ付テ引籠アルナレ  
ハ。知ヌ事モアルベキカ。兵部ハ兼テ淵底ヲ知ヌ

事ハヨモアラジ。當世ノ人心頼カタキゾカシ。急  
ギ兵部ヲ謀リ寄。腹切セヨト仰セラレシヲ。此ニ  
成御前へ抵候シテ。加程不覺ヲ思ヒ玉フ分野ナ  
シバ。爭カ彼等ニ御心ヲ許レ玉フベキ。况ヤ兩人  
ノ者共度々諫言仕ルユヘ。機嫌ヲ損ナシ。近所ニ  
モ參リガタキ仕合ナレバ。存ゼザルコソ必定ニ  
候ハント。種々ニ陳ビ申ス故。夫ハ左モアルラン。  
去共用意支度センニ。不審ノ立ベキ事多カラシ  
ニ。兎角ヲ知ヌト云ハ心得スト。若々敷上意アリ  
シヲ。彼者共兼テ物語仕ル事ノ候へ。御野心ア

ラントハ。努々存知モ寄ザル事ニコソ。其議ナレ  
愈万事ニ目ヲ配リ。意ヲ付候様ニ計ニ申サント  
言葉ヲ盡シテ。退出仕ルト談リケレバ。田中聞テ  
某ガ身ノ上ヲ何者ガ謬言シツラント思ヒ候ニ  
存ジノ外ナル一大事ヲ承ハリ候。仰ノ如ク頃日  
ハ。外様者ノ儀ニ成候ヘハ。争カ大事ノ企テヲ知  
セ玉フベキ。上意ニ惡シト思召モ至極セリ。去ナ  
ガラ夢ニモ存ゼサル段ハ。如何様ニ陳謝申スベ  
シ。此上ハ愚意ヲ盡シテ窺ヒ申サント云ケレバ。  
三成悦ニテ。御邊ハ普請場ヘ早々歸リ玉フベシ。

上意ノ使者ヲ以テ申サントテ。田中ヲ河内ヘゾ  
還シケル。其後上意ナリトテ。使者ヲ以テ申遣シ  
ケルハ。堤ノ普請ハ誰ニテモ申附置シ。秀吉公ノ  
御成前ナレバ。急ギ歸京アツテ。聚樂ノ御殿万事  
心ヲ付ラレ。掃除等ニ至ルニテ。氣ヲ配リ然ヘキ  
御説ノ由傳ケル。田中ハ夫ヨリ聚樂ヘ参リ。万端  
ニ心ヲ付シカトモ。差テ思ヒ當タ九事ハ非サリ  
シカトモ。覺束ナキ事モアリケルニヤ。昨日今日  
兎角ノ様共ヲ。三成ガ許ヘ告ケレバ。三成謀トハ  
就トシテ。同年ノ七月八日ニ登城シテ。秀次公ノ

逆心事既ニ露頭仕ル条速ニ征伐ナクンバ天下  
ノ大事近憂タラント。則チ味同心ノ大名ヲ誌シ  
テ認メ置シ謀書ヲハ太閤へ見セ奉ル。秀吉公驚  
キ給ヒ。此上ハ議擬スルニ及バズトテ石田治部  
少輔三成増田右衛門尉長盛長束大藏大輔正家  
徳善院玄以法印等ヲ以テ急キ聚樂ノ城ヲ御披  
アシト仰付ラレケレバ。コハ如何ト思ヒナカラ。早  
速聚樂へ参リテ。四人ノ使者申サレケルハ。先高  
野山ノ方へモ御越アリテ。一旦ノ御憤ヲ鎮ラレ  
御誤リナキ通り仰セ披レナバ。其虚名杯カ晴サ

セ給ハサルベキヤト。理ヲセメテ申上ラレケレバ。  
秀次公モ暫シ案ジ煩ハセ給ヒ。所詮聚樂ニテ兒  
ニモ角ニモ成ベキト思ヒ定メ玉ヒケルガ。雖然  
天恩父子ノ義ヲ重ジ一先高野山へ趣ニモ是ナ  
ランカト。御心ヲゾ苦メ玉ヒケル。實ニヤ樹靜ナ  
ラント欲スレドモ。風是ヲ動スナラヒニテ。秀次  
公奥ニ入セ給ヒ。近臣白井備後守本村常陸介熊  
谷大膳正此三人ヲ一間所ニ召シ。我今進退爰ニ  
究リ。向々ノ心底如何ト有ケレバ。白井備後守  
餘ノ辭ヲモ顧ズ。今聚樂ヲ御披キアランハ。中々

勿體ナキ次第ナリ。愚案スルニ此三人ノ内一人  
伏見へ遣サレ。一往理ヲ盡サセ。其上ニモ御承引  
ナク。討手ノ向ハン時ハ。我々眞先懸テ討テ出テ  
命ヲ塵芥ヨリモ輕ンジ討死シテ。叶ハザレ時節  
到來セバ。御腹召レ玉ハンニ。何ノ仔細カ候ハン  
ト氣也バウジテソ申ケル。其時熊谷申ケルハ。備  
後守申サル、處モ。一理アルニ似タリト雖。其  
退ヒテ。愚案ヲ廻スニ。此城ニテハ。戰ヲ勵ミ御腹  
召レンズル事。流石天照太神ヨリ讓ヲ受サセ給  
フ玉城ヲ穢サル、恐其一。次ニ太閤ヨリ請得サ

セ給ヒシ聚樂ナレバ。天道ノ惡所其二。次ニ昨日  
今日マテ。六十餘州ニ關白ト仰レサセ玉ヒ。今更  
下露々々籠城ニ及ン事。日本ノ諸士ノ云甲斐ナ  
ク思ハンモ其ニ。彼是世ノ誹リ多ケレバ。唯今宵  
志賀ノ山越ニ。東坂本へ移ラセ給ヒテ。父子ノ禮  
儀ナレバ。一旦帝都ヲ御披キ。誣者ノ實否ヲ知シ。  
其明メ無ニ於テハ。討手向フベシ。其時ハ大獄ヲ  
本城トシ。我々ハ唐崎表へ打テ出。日本ヲ引請テ。  
合戰ニ及バンコト。願フトコロノ幸ナリ。凡御人  
數モ三方餘ハ有ヌベシ。若御運盡サセ御腹メサ

レシニ。何ノ残念カ是アラント。募キツテゾ申ケ  
ル。蒐ケル所ニ木村常陸申マウ。此節ニノソシテ  
ハ如何ニ退キ玉ヒテ。御アマリナキ通ヲ盡サ  
セ給フトモ。大閤ニ限テハ。御宥免アルベカラス。  
秦ノ子嬰果降ルヲ。項羽許ズ終ニ殺ツ。今以和漢  
相同ジ。逆モ迫タル御身ノ上ナレバ。四人ノ使者  
ヲ忽ニ討果シ。今宵伏見へ取懸。火ヲ放テ城ヲ枕  
トシテ。相戦ヒ申サンハ。弓矢トツテノ面目ナリ  
君モ戰場ニ御名ヲ殘シ玉ヘカシ。然ラズンハ京  
中ヲ燒ハラヒ。御門ヲ此城中へ行幸ナシ奉リ。

支サ、ユナバ。太閤モ杯カ天子へ弓ヲ引給フベキ。  
先京中ノ兵糧ヲ取籠。玉藥リヲ用意シテ。城ヲ堅  
クカタメナバ。噯ヒト仰セアラシム。治定ナリ。其時  
ハ十分ノ利ヲ得玉フベシト。手ニ取ヤウニゾ勸ケ  
ル。見善而急。時至テ而疑フトヤラン。秀次公モ一  
所懸命ノ思案ナレバ。只十方ニクシサセ玉ヒテ。御  
言葉モナシ。常陸重テ申スマウ。君ノ加程マテ云  
甲斐ナク。渡セ玉フコソ口惜ケレ。唯今伏見へ御  
出アランガ。高野へ御登アラシム。何ノ道ニモ都  
ヘトテハ。再ヒ還シ給フベカラス。路ニテ雜兵ノ

手ニ掛リ玉フカ。遠國へ流サレ玉ヒテ。俊寛ガ思  
ヲナシ玉フカ。又ハ御介錯モナキ。御生害アラシ  
時ハ後悔アリトモ。カヘルマジト。居長高二成テ  
ゾ謙メケル。爰ニ阿波木上頭進出テ常陸介申サ  
ル所モ當理ナリトイヘテ。伏見ノ大殿ハ心早キ  
大將ニテ候ヘバ。君ノ御謀叛必定ト思召ハ。幾々  
ノ沙汰有ベカラズ。即時ニ押寄玉フベシ。只三成  
ガ種々ニ護シ申スニテゾアラシ。太閤ノ心慮ニ  
ハ承引ナキト存ジ候。サアラン時ハ何心モナク  
御參勤アラバ。弥御心モ解サセ給フベシ。唯今ハ

見へ押寄タリトモ。墓々シキ利ヲ得サセ玉フ事  
思ヒモ寄ズ。其故ハ彼方ハ譜代重恩ノ士ナレバ  
十騎ガ百騎ニモ對ベシ。此方ハ大勢ナリトモ。諸  
國ノ借武者ニテ伏見ニ親ヲ持子ヲ居タル者。或  
ハ妻愛ニ心引サレ。何ノ用ニモ立ベカラズ。又此  
城ニ籠リタリテ。嚴ク合戦セバ。頓テ勝負モ窮ル  
ベキガ。遠攻ニ打圍シ數日ヲ送ハ。兵糧乏クナラン。  
其時ハ親類縁者ニ附テ降參シ。敵ニハカヲ著ル  
トモ。味方ノ用ニ立モノハ候マシ。人ノ心ノ替リ  
易キ事ハ。古今其例シ多ケシバ。今更言ニ及ハズ。

去トハ頼ナキ人心ト。理ヲ盡シテゾ申シケル元  
ヨリ應シタル秀次公ニテマシメセバ。實ニモト恩  
召聚樂ヲ出玉ハントノ志シ御運ノ程コソ拙ケ  
シ。比ハ文祿四年七月八日。御輿一丁ニ道具ヲモ  
指置御供ニ三十八歩立ニテ聚樂ノ城ヲ出サセ  
給。伏見ノ城ヘト急ガセ玉フニ。五条ノ橋ヲ打  
渡リ太佛殿ノ前ヘ過行セ玉ケケルニ。何トヤラシ。  
前後ノ體サハガレク闊テ。行違人モ立迷ケレバ。  
供奉ノ人々是ハ早討手ノ迎タルト見候。雜兵ノ

東國太平記卷之一上

三三三



